

学 会 報 告

地域農林経済学会第56回大会

林 岳

昨年10月末、桃山学院大学で開催された地域農林経済学会大会に参加した。今回の大会シンポジウムでは、「地域農林経済学者の役割と評価－社会貢献の視点より－」というテーマが掲げられ、3人の講演者の報告のもと、研究者は社会貢献のために何をすべきかについて活発な議論が行われた。

講演者の1人である岩手大学の木村氏は、大学の社会貢献について報告した。木村氏は、大学の社会貢献の第一歩としては、大学教員には教育および研究の他に社会貢献という責務が課されていると、教員自らが意識を改革する必要があると主張していた。そして、大学教員の意識改革ためには、教員を統括する人物が専門分野を越えた雑学的知識を持つことが重要であり、それも単なる事情通だけではなくアカデミックな知識を持つことが必要であると論じていた。

また、もう1人の講演者である農業開発研修センター会長の藤谷氏の発言も興味深かった。氏の話によると、研究機関へのクライアントからの調査・分析依頼に対して、どのような結論が導かれるかは、実際に作業を進めてみないとわからないものであり、事前にクライアントの要望に添う結論を出すとは約束してはならないという。アカデミックな視点を無理に曲げて、クライアントの要望に合わせることは、研究機関としての存立意義が問われると主張していた。藤谷氏が長を務める農業開発研修センターは官庁付属の研究機関ではないので、クライアントの望む結果を導けるかどうかかわからないと言うと、大切なクライアントが他の研究機関に流出してしまう可能性もある。それでも藤谷氏がクライアントの要望に添う結論を出すとは確約すべきでないとは主張するのは、研究機関としての本質を守

ろうとする藤谷氏の強い意思の表れであろう。

さて、わが政策研の使命は「行政からのニーズに応えること」と言われており、これに対して政策研の社会貢献とは、「行政以外からのニーズに応えること」になろうか。所内の研究者は行政からの依頼とともに、外部の機関や大学などからの調査・分析や共同研究にも対応している。我々も時として期待される結果が出ないときには、なるべくその期待に応えるべく、さまざまな手法を検討しより良い結果を導出している。しかし、その過程において、アカデミックな視点を逸脱して鉛筆を舐め数字をいじることは、研究者としての社会貢献の責任を果たすことにはならず、一時期話題となった某テレビ番組のデータ捏造問題と何ら変わらなくなる。

シンポジウムの話が長くなったが、個別報告では、私の共同研究者が広域農道のリダンダンシー機能に関するテーマで報告した。「リダンダンシー」という言葉はあまりなじみがないかもしれないが、日本語では「冗長性」、「柔軟性」などと訳されることが多い。気候変動の影響か、近年各地で台風や豪雪などの自然災害が頻発している。今回の報告は、国道などの幹線道路が災害等により断絶した場合の代替ルートとして広域農道が有する経済的な価値を評価するという内容であった。

ところが、この学会の個別報告セッションは、参加者数に比してかなり多数設定されており、あまり参加者の関心を引かないセッションでは、聴衆が数人ということもあった。今回、私たちが報告したセッションも座長や次の報告者の他に聴衆がほとんどいない寂しいものだった。当然、活発な議論を行えるわけもなく、フロアーからの質問もほとんどない状態で、座長との質疑応答に終始した感じであった。もっとも、報告内容によっては同じセッションでも聴衆が増減するので、聴衆の少ない報告は関心の低いテーマということでもある。参加者の関心を引くテーマを選定して良い報告をしなければ聴衆が集まらないという意味では、かなりシビアな学会である。